

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	かただ そん あさひ 片田 孫 朝日	所属・職名 京都大学文学研究科社会学・博士課程
e-mail	Asahi@t02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp	
発表題名 (英語)	How Gender Regulation Actually Works? —Case Study of Physical Education in a Japanese High School—	
著者名	Asahi S.Katada	
会議名 (英語)	Gender and Education Association 7 th International Conference	
開催地(国、市)	England, London	
参加期間	2009年 3月 25日 ~ 3月 27日	

Gender and Education Association は、フェミニズムの立場から教育に関わる諸現象を研究し、政策や実践について議論する学会である。今年、7回目をむかえる国際会議は、3月にイギリスのロンドンで開催された。今年の統一テーマは、「教育における規制と抵抗」であり、人種や宗教、貧困などをめぐる問題と女性の教育、ネオリベラリズムの教育への影響、フェミニズム教育学、性教育やクィア教育学、男性性への批判的研究、あるいはグローバルなメディアと女子イメージの構築など幅広いテーマで、およそ 90 の部会とシンポジウムが3日間にわたって行われた。

<発表内容>

報告者は、「ジェンダーと身体の規制」という部会で、日本の高校における体育授業のフィールドワークに基づく発表を行った。日本を含む多くの国で、体育は、男女別習や男子へのより高い能力期待など、他の教科にも増して性別の規制が働く教科である。これまで、イギリスなどでの研究は、体育授業を通じた生徒のジェンダー・ステレオタイプ(「女子」の身体能力の欠如など)の習得を論じてきた。本報告は、こうした知識の学習に加えて、学校体育におけるジェンダー再生産の特殊性は、一定の生徒たちが、男女別の授業や評価規準を、「女子の利害」を維持する上でも「公正 fair」なものとして支持することにあるのではないか、という問題関心に基づく。生徒たちは、知識を無批判に信じているだけでなく、考え、判断し、一定の「公正」観を授業を通じて作り上げ、これがジェンダー再生産に寄与していると考えられる。

発表では、日本の体育ではポピュラーであり、「体力の男女差」が明確に認識される種目である持久走の授業について、女子生徒たちが、男女別の評価規準や目標設定を、自らの高い評価や意欲を維持する上でも適切なものとして支持するインタビュー結果を示した。また、持久走の能力が優れた男子生徒たちも、男性優位を前提に、劣位の女子の利害を考慮すべきだと主張する「家父長制的な公正観」を構成していることを論じた。他方で、男女別の能力評価に抵抗した特定の女子生徒は、授業で全員一律のノルマ設定そのものに反対することで、家父長制的な公正観から自由であることを指摘し、全員が同じ条件で競争するスポーツ的価値を生徒自身が問題化する重要性を結論とした。

学会発表渡航支援報告書**<質疑応答>**

この発表に対し議論の流れについては理解されたが、教師による男女別の期待や評価の方法といった事実関係について会場から質問が出された。一つは、教師による持久走の能力評価には、速さや距離といったスポーツ的価値以外に、遅い走者が努力して走ったことは評価されないのかという評価規準に対するものであり、もう一つは、持久走以外の種目でも男女別の能力期待と評価が行われるのかというものであった。これらに対して、事実関係の説明が不十分だったために説明を加えた。この他、何度もグラウンドのトラックを長時間走り続けるという、この高校で行われていた持久走の取り組みそのものが、少なくともイギリスでは一般的でなく、説明を要した。日本では、冬の体育授業の定番といえる持久走そのものについて、文化的な角度から考えさせられる反応であった。

報告者が参加した部会は、どれも興味深い内容であったが、ナイジェリアやケニアの学校での女子への暴力防止のプロジェクトや、スウェーデンやイギリスでのヘテロセクシズムを問題化するクィア教育取り組みなど教育実践と結びついた部会では、とくに議論が熱心に行われ、教育の責任と可能性を感じさせるものであった。学校や教育は、ジェンダー化された公共圏／親密圏の編成に深く関与しており、その再編のための批判的知識や実践を共有し、高め合う重要性を痛感させる会議であった。